

第3類

保育者養成における造形活動についての考察

一描画に対する「苦手意識の解放」を目指して一

辻本 恵

TSUJIMOTO Megumi

保育者養成において子どもの豊かな表現を育みその楽しさを共有するためにはまず保育者を目指す学生自身が心を開き表現を楽しむ必要があり、そのためには描くことに対する苦手意識をなくすことが課題であると言われる¹⁾。しかし学生が造形活動に取り組む姿勢やその作品を見ると絵を描くことへの構えやためらいを感じることも少なくなく、その一因として描画材の理解不足があげられる²⁾。本稿では描画に対する苦手意識からの解放の手がかりとして描画材理解を目的とした造形活動が良いと考え、子どもの描画活動の中でもよく使用されるクレパスを使用し、さらに上手下手に囚われないよう平面表現の基本的要素である点・線・面を用いた抽象的表現の描画活動を展開した。この活動を通じた学生の変容を調査し、保育者を育成する養成校の造形活動について考察する。

キーワード：保育者養成、造形活動、抽象的表現、描画材理解

1. はじめに

本年度はコロナウイルス感染防止対策として初回から6回目までの授業が遠隔授業となった。「保育内容・造形表現Ⅱ」の遠隔授業の課題についてはシラバス通りに進められる課題はそのままに、環境の理由からシラバス通りに進めることが難しいものについてはそのねらいに準拠するよう描画課題を設定した。(付録にシラバスを掲載) 課題の描画材や支持体は各学生の手元にあるものを工夫して使用することとした。使用される描画材については1年次に保育内容・造形表現Ⅰにおいて子どもにとって身近な描画材を用いた様々な技法を学んでいることから、保育の実践の中で用いられることが予想される描画材が多用されると考えたが、そうではなかった。鉛筆など身近で限られた描画材しか自宅に置いていなかったのか、造形表現Ⅰで使用していない描画材で作品を仕上げる学生が多くいた。造形表現Ⅰでスクラッチやパチックなどの技法で使用し

たクレパスは箱を開けてすぐに使え、直径11mmと子どもの手に合ったサイズに設計されており、やわらかくのびがよい、折れにくく面塗り、線描きが自在で混色が美しい、重色ができるなどの特徴がある(サクラクレパスHPより)。このような特徴を知るとまだ筆圧の弱い幼児でも扱いやすく、細部を塗るのは難しいが線や面を塗っていく時に様々な技法が可能で、自由に描ける描画材であることが想像できる。

しかし普段の制作過程の学生の会話で「手が汚れるから嫌い」「色が混じって汚くなる」などクレパスの負のイメージの発言が聞かれることがある。今回の遠隔授業課題でクレパスを使用した学生が非常に少なく提出課題全体の1%に満たなかったことと無関係ではないだろう。そこで描画材についてのつまづきの所在を明らかにするため描画材に対する意識アンケートを実施したところ、クレパスを使った時に感じたことに関して

- ・細かいところを塗るのが難しい。
- ・はみ出してしまう。

- ・擦れて画面を汚してしまう。
- ・混ざると色が汚くなる。
- ・手が汚れる。

などの記述が見られた。このような描画材に対する固定概念が「失敗した」「私は下手、不器用」などという思い込みに結びつき苦手意識を生み出す要因の一つとなっているのではないだろうか。

幼稚園教育要領 領域「表現」内容の取扱いには「生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。」³⁾と明記され、保育者が様々な描画材を準備したり、多様な表現の仕方に触れられるように配慮したりして子どもの豊かな表現を支援していくことが求められている。それぞれの描画材にはそれぞれの良さがあり使い方がある。保育者自身が様々な描画材に触れ、試し、そのよさを理解する必要がある。

シラバスではクレパスを使って「似顔絵を描く」内容が設定されている。この課題はクレパスの使い方を再確認し表現の工夫を施すことを目的としており、また前述のような描画材への固定観念を払拭するための一手として子どもの造形活動でも多く使用されるクレパスを描画材として選ぶこととし、クレパスという素材の特徴、用途を知識として十分に理解すること、技法や様々な表現方法を技能として身に付けること、さらに経験不足からくる苦手意識をなくすことを目指し、授業を展開することとした。

描画材の理解不足と同様に、再現性の優先、技術（上手さ）優先主義もまた描くことへの苦手意識を生じさせる一因であると言われる⁴⁾。描く対象物があると描かれたものの再現性、具体性に目が行き、上手下手という評価をしがちである。しかし現実の世界に存在する、あるいは存在するであろう一定の事象を、それに相応する具体的な形態において再現、模写するという方法を用いない抽象的表現は、具象表現における描画と実物との差異から生じる再現度合いによる技術的な評価が当てはまらない⁵⁾ことから上手下手に囚われず、クレパスという描画材を理解し、描くことへの苦手意識をなくしていく手法として効果的であると考えられる。また新妻は造形活動に向かう基本的な衝動を2つの衝動に分け、この2つの衝動による造形の表象を「色彩

や素材などの造形要素を使って具体像を表す意思とその具体像」をA言語、色彩や素材などの造形要素を自立させる意思とその表象」をB言語とし、B言語の要因は「未知に向かう探究心と、手の突出した探索能力によって操作する「手のよろこび」にある」と記し、「B言語による活動を取り込むことで「A言語・苦手派」は造形に親しむ新回路が敷かれ探索的衝動Bが再起する。また「A言語・得意派」には多義的な価値を敷設する別回路が新鮮に映る。」⁶⁾と述べている。これらの先行研究は保育者養成の造形活動においても抽象的表現に慣れ親しむことが「絵を描くことへの苦手意識」を軽減する手立てとなることを示唆している。

そこで今回、クレパスを使った抽象的表現を体験してもらい、学生がそこから何を感じ学びとったのかをアンケート結果から分析し保育者育成の造形活動について考えてみたい。

2. 方法

対象者

本学こども学科「保育内容・造形表現Ⅱ」受講者 52名

実施期間

令和2年6月25日～7月10日

実施内容

1) 描画材に対する意識アンケートを実施

抽象的表現の体験前に描画材への意識調査を行った。設問を「今までに使用してきた描画材についてどのように感じていますか」とし、自由記述の形で回答してもらった。

2) 感覚をひらくクレパスのエクササイズ

クレパスの感覚を呼び起こし、タッチや混色の可能性を知るため、1枚の紙に様々な線や点、塗り方を試した。

3) 点・線・面の抽象的表現の演習

エクササイズで明らかになった様々な表現を思い返して、クレパス（16色）を使って画用紙を支持体に平面表現の基礎的要素である点・線・面を用い、抽象的表現を行った。演習後に他者の作品との比較をし表現の相違の認識を促した。

4) 自由記述による学びのアンケート

抽象的表現の演習の体験後に設問を「点・線・面の抽象画を体験してどう感じましたか?」として、活動を体験した感想を自由記述の形で回答してもらった。

提出された1)と4)の自由記述文をテキスト化した後、「文」を単位にして、頻出語を抽出、共起キーワード図を作成した。

一連の手続きでテキスト分析にはユーザーローカルテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) を用いた。

3. 結果と考察

テキスト分析の結果

表1 自由記述内容（意識アンケート）

単語	出現回数	単語	出現回数	単語	出現回数
色	59	組み合わせ	2	付け方	1
しまう	26	背景	2	細部	1
難しい	21	バランス	2	画材	1
塗る	17	紙	2	グラデーション	1
絵の具	16	扱い	2	直線	1
クレヨン	14	同士	2	面積	1
作る	12	想像	2	模写	1
上手い	11	毎回	2	造形	1
絵	10	1回	2	やり直し	1
混ざる	10	途中	2	汚れ	1
描く	8	変	2	きれいな	1
できる	8	場所	2	工夫	1
混ぜる	7	上	2	割合	1
感じる	7	にじむ	2	むら	1
違う	7	擦れる	2	まった	1
思う	7	はみ出る	2	苦戦	1
細かい	7	混じる	2	アイデア	1
失敗	6	乾く	2	タッチ	1
描ける	6	効く	2	片方	1
つく	6	合わせる	2	遠く	1

表2 自由記述内容（学びのアンケート）

単語	出現回数	単語	出現回数	単語	出現回数
色	69	好き	10	薄い	5
できる	46	気づく	10	楽しさ	4
描く	41	色々	9	発見	4
楽しい	35	楽しめる	9	自然	4
思う	26	グラデーション	8	完成	4
クレパス	24	指	8	白	4
混ぜる	19	すごい	8	1つ	4
使う	16	わかる	7	黒	4
クレヨン	15	様々	6	普段	4
自由	15	子ども	6	嫌	4
塗る	15	作品	6	久しぶり	4
面白い	15	変える	6	以外	4
模様	14	つく	6	ほかす	4
違う	13	可愛い	6	混ざる	4
考える	13	よい	6	学ぶ	4
スクラッチ	12	上	5	変わる	4
知る	12	こする	5	作る	4
ベビーパウダー	11	汚れる	5	終わる	4
きれい	11	重ねる	5	太い	4
絵	11	いく	5	黒い	4

記述内容からの検討

頻出語

「色」の出現回数が意識アンケート、学びのアンケート共に最も多く、これは描画材の属性についての記述に多く用いられたからである。「混ぜる」「混ざる」「グラデーション」も同様に描画材の属性についての記述中に見られた。表1の意識アンケートでは「しまう」が続いているが表2の学びのアンケートでは「できる」が続いている。意識アンケートでは「難しい」が続き、抽出語に「失敗」「やり直し」が見られる。学びのアンケートでは制作過程に関連する「描く」「楽しい」「自由」「面白い」の語が続き、「模様」「スクラッチ」「指」「こする」「重ねる」など技法や描画材の工夫についての語が抽出された。また「できる」「知る」「気づく」「わかる」「発見」「学ぶ」など新たな気づきに関連する語が抽出されている。

共起関係

まず意識アンケートの自由記述における共起ネットワーク上に現れる学生の認識をみる。

「色」は最頻出語であり「しまう」「混ざる」「作る」に繋がっている。「混ざる」はさらに「汚い」に繋がり、この要旨は「色が混ざって汚くなってしまおう」と推測する。記述には「クレヨン同士の色が混ざると変な色になるのが嫌だった」「色同士が混ざって汚い色になった」「クレヨンは他の色と混じってしまった時に変な色になってしまった」があった。

「絵」は「感じる」「描く」と連結しておりそれぞれのグループを形成する語には「うまい」「きれい」「難しい」などが見られる。記述には「クレヨンは自分の思い通りに絵を描くのが難しいと感じた」「他の場所について線が太くてうまく描けないことが多い」「きれいに色が塗れない」「色を塗る時どうしたらきれいに見えるか考えて塗っているはずなのに、汚い色になったりして難しいなと感じた」があった。「考える」を中心にしたまともからは「バランスよく描きたい」「きれいに仕上げたい」と考えて絵を描くが、「全体のバランス、直線や自然な曲線を描いていくのが難しい」「思い通りに絵を描くのが難しい」「考えていたもの、思っていたものと違う」などの記述から自分には絵心がない、苦手だ、といった思い込みが生まれる背景がうかがえる。

「薄い」「濃い」はそれぞれ「見にくい」「調節」と繋がり、「色が薄くて見にくい」「薄くなったり濃くな

ったりして色を調節するのは難しい」と推測したが「濃さ薄さを工夫して立体感を出すことが苦手」「黒や濃い色と薄い色が混ざってしまった時に少し汚くなって見えてしまう」「色が薄くなって遠くから見にくい」との記述があった。

その他で特徴をなしている関係は「修正」と「悔しい」「組み合わせ」と「おかしい」「場所」「太い」と「多い」、といった組み合わせが見られる。記述には「修正がきかないから悔しい」「色の組み合わせが難しい」「線が太くてうまく描けないことが多い」があった。

次に学びのアンケートに現れる学生の認識を捉え活動前後の変容をみる。

「色」は「混ぜる」「塗る」「できる」に繋がり、「できる」は「汚れる」「嫌」「指」と塊を形成している。さらに「スクラッチ」「こする」「新しい」「発見」などと結びつく。記述には「普段組み合わせたことのない色を組み合わせることで様々な色ができる」「色は混ざってもかわいいしきれい」「色を混ぜると様々な表情が見れてよかった」「混ぜることに抵抗があったが挑戦してよかった」「初めは手が汚れるのが嫌だったが思い切って指の腹を使ったらだんだん楽しくなった」「手を汚しながら描くことは楽しい」「黒じゃなくても他の色でスクラッチをすることができる」があった。事前の意識アンケートと比較すると「できる」は出現が増加し「色」と関連しあっている。学生は色を塗っていく際に新しい色を作り出せることや既知の技法でも様々なやり方があることへの気づきをこれらの語をキーワードとして用いたのだろう。また意識アンケートでは色同士が混ざることや手が汚れたり紙が汚れたりすることにクレパスへの苦手意識が感じられたが、事後の学びのアンケートからは手が汚れることも気にせず、色を作ること、塗ることに没頭する様子が見える。

「技法」を介した「ぼかす」「楽しさ」のまともには「ぼかしなどの技法は楽しい」という要旨を推測した。記述には「手でぼかせることを知った」「様々な技法を体験できて楽しかった」があり、クレパスの技法の楽しさを思い返しながら制作する姿が感じられる。さらに「白」を介した「混ざる」「いい」のまともには技法だけでなく「白が混ざるといい」というような素材の使い方の新しい発見を想起させる。記述には「今まで白のクレパスの使い方があまりわかっていなかった」「色を塗った上から白のクレパスで模様を描いてみるといいなと思った」「白のクレパスに違う色がついていると色が混ざってしまう」があった。このような技法

や具体的な色と色を混ぜ合わせた記述や使用時の配慮点については意識アンケートでは見られなかった。ここから制作過程でクレパスという素材を、様々な実験や挑戦を通して理解を深めていく姿が捉えられる。

「なじみやすい」「淡い」は共に意識アンケートには出現しなかった語であるが学びのアンケートでは出現数は少ないながらも強く結ばれた語である。「強い」「弱い」も同様である。これらはクレパスの表情の多様さへの気づきであると推測する。記述には「反対色を混ぜてみると色がなじみやすい」「力加減で線の太さが変わった」「力の強さや弱さで線の感じが変わること」に気づいた。さらに「弱い」は「難しい」に連なる。「弱い線を描くよりも中くらいの線を描くほうが難しかった」との記述から描く行為そのものへの気づきを感じられるが「まっすぐ線を引くのは難しい」との記述もあり、このような描くことへの経験不足を解消するよう具体的な造形指導を行うことが大切であると考えられる。

「濃い」「薄い」は意識アンケートにも登場したが「クレヨンならではの濃さやうすさがある」「薄く、濃く描くことでいろいろなように見せられる」など描画活動で学生自ら体験した記述がみられた。

学びのアンケートで特徴的な語である「描く」「楽しい」が連結するまともは「好きな模様を自由に描くことは楽しい」という要旨を推測する。記述には「自分の好きな色、好きな模様で描く楽しさ」「自由に好きな色・形・模様を決められるので楽しく描けた」があった。要旨は学びのアンケートにのみ出現しており、「完成図を何も考えずに描くのも楽しい」「何も考えずに自由に描くのはすごく楽しかった」という記述などをみると、「考えて絵を描くことの難しさ」から「自由に絵を描くことの楽しさ」への描画に対する意識の変容と考えられる。学生自身が抽象的表現を体験し「絵を描くことは楽しい」との認識が高まったのであろう。

また「子ども」は「楽しめる」「良い」と繋がる。記述には「小さい子達でも楽しめる」「子どもでも楽しめる」「子どもも自由に好きなものを描くことが好きだと思えるので良い」などがあった。自由に描く体験が子どもの造形活動と結びついていることがうかがえる。

今回の活動では絵を描くことの苦手意識からの解放への手がかりとして、描画材理解を目的とした抽象的表現活動を行った。結果として描画材の使用法や表現法への学びが描く行為の楽しさに関連して記述されており、抽象的表現が描く具体像を持たない非再現的活

動であることでクレパスという色の塊を掴み、握って、描くといった感触や描画感覚の直接的で身体的な関りを深める効果が確かめられた。同時に抽象的表現活動が新妻の言う探求心と「手のよるこび」をもたらし、苦手意識からの解放を促す有意義な活動であることがわかった。しかし今回の活動は単発のものでありデータ数も十分であるとは言えない。データの収集と分析が今後の課題としてあげられる。このこともふまえて、保育者養成の造形活動として描画材の身体的理解を深める抽象的表現活動を取り上げていくことは意義があると考えられる。

4. 引用文献・参考文献

- 1) 槇 英子 「保育をひらく造形表現」 萌文書林 2008 p15
- 2) 森田 ゆかり 「学生が柵をこえるときーはみだしでもオモシロイ！ー」 日本実践美術教育学会 実践美術教育vol.13 2018
- 3) 文部科学省 「幼稚園教育要領解説」 フレーベル館 2018
- 4) 木俣 創志 「美術を“好き”にするために (2)ー幼児教育を学ぶ人への造形指導ー」 京都市立芸術大学 美術教育研究会研究誌「美」第196号 2015 p.58
- 5) 河合 規仁 「臨床美術アートプログラムにおける「アナログ表現」の研究ー「アナログ表現」における抽象的表現の効用ー」 東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要 第2号 2012 p.17 p.23
- 6) 新妻 健悦 「アトリエ・コパンの実践 「A言語」と「B言語」を基軸とする造形活動」 美術教育 No.291 2008 p.132-133

5. 付録

2020年度シラバス（授業内容に関する部分の抜粋）
保育内容・造形表現Ⅱ

ディプロマシーとの関連
<認知的領域（理解・思考）>
4. 自ら設定した課題について、保育学・心理学・社会学などの研究方法を用いて考察することができる。

＜技能・活動的領域（技能・表現）＞	
5. 子どもの感性や個性を大切に育てるための保育に関する（音楽・造形・体育など）の実践力を身につけている。	
授業のテーマと概要	
テーマ：様々な素材を用いた造形活動（立体造形）や作品制作を通して、保育における表現活動の理解を深める。	
概要：保育の現場で使用する教材の制作を行う。また保育の現場で活用できる廃材や身の回りのものを用いた造形あそびや作品制作を行う。造形活動の指導案作成・実践も行う。	
到達目標	
身近な素材を用いた作品の制作を通して保育の造形指導に必要な基礎知識や技能を身につける。	
回	授業計画
1	ガイダンス
2	造形活動① スポンジ人形製作（アイデアスケッチ・素材研究）
3	造形活動① スポンジ人形製作（形成）
4	造形活動① スポンジ人形製作（着色）
5	造形活動① スポンジ人形製作（組み立て）
6	造形活動の指導案と実践① 季節のあそび
7	造形活動の指導案と実践② 素材のあそび
8	造形活動の指導案と実践③ 描画あそび
9	造形活動の指導案と実践④ 粘土あそび
10	造形活動② 似顔絵（人物観察・描画する）
11	造形活動② 似顔絵（描画仕上げ・鑑賞）
12	造形活動③ 廃材を使って（厚紙による形状の立体化）
13	造形活動③ 廃材を使って（新聞紙による肉付け）
14	造形活動③ 廃材を使って（仕上げ）
15	まとめ・鑑賞

ピアスーパーバイザーからのコメント

本稿は、保育者養成校における造形活動において描画に対する苦手意識をなくし、学生自身が描画活動を通じた表現を楽しむための方法について考察されたものである。クレパスを使って抽象的表現を体験する授業実践についての学生の記述から、その方法が有意義な活動であったことを示唆している。保育者養成校の表現活動においては、どの分野でも苦手意識の開放が共通の課題である。活動を通じた学生の変容調査は分野を超えて参考になる知見である（担当：井本英子）